

# シリーズ「認知症」②

## 認知症の「アイントープ」検査

国立病院機構 和歌山病院

放射線科 櫻井 将喜

近年、社会の高齢化に伴い認知症患者数が増加しており、2025年には700万人に上り、高齢者の5人に1人の割合に達するとみられています。

認知症は、老化による「もの忘れ」とは違い、何らかの病気により、脳の神経細胞が壊れるために起こる症状や状態のことを言います。認知症の症状は、記憶障害、判断力、理解力の低下、暴言、暴力、徘徊、幻覚、妄想など多岐にわたります。そして、これらの症状は徐々に進行していき、社会生活や日常生活に支障をきたすようになってまいります。

従って、このような状態になる前に早期に認知症をみつけ、原因となっている病気を特定し、治療を開始することが重要となります。

近年、認知症の診断技術は進んできており、以前に比べると症状の軽い段階でも認知症の診断が付けられ、早期に治療を開始できるようになっています。そのため、まだ認知症の初期症状である「同じことを何度も言う」「同じことを何度も言う」「同じことを何度も言う」

名前が出てこなくなったり「以前は興味があった事に興味が無くなった」「怒りっぽくなった」等の事例が多くなれば、ためらわずに受診してください。

認知症の原因となっている病気を特定する方法は、脳の形を診るCTやMRI検査と脳の働きを診るアイントープ(RI)検査があります。これらの検査により、アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症、血行性認知症など、どの病気であるかを診断していきます。

今回は、その中で特に重要な役割を果たすRI検査について紹介していきます。

RIとは放射性医薬品のことです。RI検査は、微量の放射線を出すRIを体内に投与し、RIが体内の臓器や組織に集まる様子を専用の装置で画像化する検査です。

この検査により脳の血流の状態が分かり、血流が不足している場所から認知症の原因となっている病気をみつけていきます。典型的な例で、側頭、頭頂葉外側、後部帯状回の血流が低下している

と、アルツハイマー型認知症を疑います。アルツハイマー型は最も多く、認知症患者の約半数を占めます。また、後頭葉の血流低下ならレビー小体型認知症を疑い、前頭葉、側頭葉の血流低下であれば、前頭側頭型認知症を疑います。

2014年よりタットスキャンと呼ばれる新しいRIが発売され、ドパミン神経の状態を画像で確認できるようになりました。これにより、今まで見逃されやすかったレビー小体型認知症や手足の震えなどが起こるパーキンソン病の診断が向上しています。

RI検査は、認知症診断の上で非常に重要な役割を担っています。早期に認知症をみつけ、原因となる病気をみつけるのに必要不可欠な検査です。そして、注射以外は苦痛を伴わない検査なので安心して受けてください。

早期に治療を開始するには、何より認知症の初期段階で患者さんに病院に受診していただく必要があります。認知症が気になられる方は、当院では「もの忘れ外来」を開設しておりますので、受診していただきます。

早期に認知症を発見し、早期に治療を開始して、これまでと変わらない生活を少しでも長く営んでいただけたらと思います。